

文部科学省「地(知)の拠点(COC)整備事業」(平成25～29年度)／「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(平成28～31年度)=長岡地域<創造人材>養成プログラム

2016長岡大学地域連携研究センターシンポジウム ボランティア活動で人の輪(和)をつくろう!

長岡大学はこの間、COC事業の一環として、産業競争力(平成25年度)、創造人材(平成26年度)、人口減少問題(平成27年度)の地域課題解明に取り組んできました。今年度は、さらに、地域におけるボランティア活動の現状を把握し、一層の活性化・発展をめざしてシンポジウムを開催します。



長岡市内では、ジュニアからシニア世代まで幅広く、経験や技術を活かして様々なボランティア活動が行われています。しかし他方で、メンバーの高齢化や世代交代の難しさから、シニア世代のボランティア活動に困難も見えています。こうしたなかで、ボランティア活動を一層促進するためには、ボランティアセンターの役割がより重要になっています。

本シンポジウムでは、ボランティア活動に関する調査結果を報告するとともに、ボランティア活動を推進する方々をパネリストに迎えて、長岡地域におけるボランティア活動の活性化・発展の方向を議論したいと考えます。

長岡地域でボランティア活動を推進し、関心をお持ちの方々など、50名超の皆様にご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。

記

- 1 名称 2016長岡大学地域連携研究センターシンポジウム
- 2 テーマ ボランティア活動で人の輪(和)をつくろう!
- 3 時期 平成28年11月18日(金) 14:00～16:30 *13:30～受付開始
- 4 会場 長岡市社会福祉センター(表町2-2-21)
- 5 参加費 無料
- 6 次第

第1部 基調報告 「ボランティア・NPO活動の現状と課題」

長岡大学准教授 米 山 宗 久

第2部 パネルディスカッション

テーマ: 「ボランティア活動で人の輪(和)をつくろう!」

パネリスト

長岡市社会福祉協議会ボランティアセンター班長

宇佐美 信 久 氏

NPO法人市民協働ネットワーク長岡

高 橋 秀 一 氏

長岡傾聴ボランティアサークル会長

田 所 典 子 氏

フードバンクにいがた長岡センター

山 崎 一 雄 氏

長岡大学准教授

米 山 宗 久

コーディネーター 長岡大学地域連携研究センター運営委員長

原 田 誠 司

7 主 催 長岡大学地域連携研究センター

後 援 長岡市、長岡商工会議所、長岡市社会福祉協議会、NPO法人市民協働ネットワーク長岡

2016・11月長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

主催者の開会ご挨拶

長岡大学学長
地域連携研究センター長

村山光博



本日はお忙しいところ、地域連携研究センターのシンポジウムにご参加をいただきましてありがとうございます。長岡大学の地域連携研究センターは平成25年度に開設されましたが、毎年この時期にはセンター主催のシンポジウムを開催してきました。これまでは、主に地域経済や産業に関するテーマで行って参りましたが、今回はじめて「ボランティア」をテーマとして行わせていただくことになりました。

この横断幕にも、「地(知)の拠点」というマークがついていますが、長岡大学は平成25年に文部科学省の「地(知)の拠点」整備事業に「長岡地域<創造人材>養成プログラム」というプログラム名で応募し、県内で唯一選定されました。このプログラムの中で本学は、長岡地域の3つの課題として、産業の活性化、市民協働による社会課題解決、地域コミュニティの活性化ということを挙げておりまして、これに対して、これまで教育、研究、社会貢献の面から地域を志向した取り組みを進めてきました。その中の市民協働による社会課題解決の一つとして、ボランティア人材の育成を掲げており、その基盤となる地域のボランティアの現状について調査研究を行いました。

今回、基調報告を行う本学教授の米山がおりますが、この米山の担当する授業では、実際に学生が地域の現場でボランティアを体験するものがあります。私のゼミに所属する学生の中にこのボランティアの授業に参加した学生がいました。それまでの彼に対する私の印象では、彼は割と自己中心的に物事を考える傾向にあり、あまりボランティア的な活動には向かないだろうと思っておりまして。しかし、この授業に参加してから少し雰囲気が変わりまして、彼は児童館のボランティアを行っていたのですが、授業で決められた時間数をクリアしてその後どうしているのかと聞いたところ、彼はアルバイトを辞めて、その後も時間のある時に同じところにボランティアに行っているということでした。彼自身の意識に少し変化があったのかなと思っております。本学としては、今後もこのようなボランティア関連の授業を活性化していくことによって、将来の地域に貢献できる人材を育てていきたいと考えております。

今日のはじめてのボランティア関係のテーマで行いますが、今後、私たち大学として何ができるのか、どのように取り組んで行くべきか等を皆様と一緒に考えて参りたいと存じます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

2016・11月長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

長岡市社会福祉協議会会長 ご挨拶



長岡市社会福祉協議会会長

本田 史朗

みなさんこんにちは。長岡市社会福祉協議会の本田と申します。今日のシンポジウムが、11月1日にオープンしたこの長岡市社会福祉センター「トモシア」で開かれ大変うれしく思っております。

先ほど聴覚に障害のある方と話をしていたら、「トモシアというのは、ともに幸せ、ともに寄り添って幸せという発想だから、こういう風に。」と手話を教えていただきました。皆さんも是非覚えていただければ幸いです。

トモシアの紹介をさせていただきますと、1階にはボランティアセンターがあります。

こちらではボランティアに関する相談と同時に、いろいろな皆さんのお話をお聞かせいただき、皆さんとの接点をつくるマッチングに力を入れてボランティア活動の活性化を図っています。さらに1階にはカフェ「く・る～む」があります。障害のある方の就労の場であり、障害のある方もない方も、多くの市民の方をあたたく包んでいこうというコンセプトのもとカフェを運営しています。まだまだ試運転の段階ですが、お立ち寄りの際は、是非御利用いただければ幸いです。

2階には、社会福祉協議会をはじめ、地域包括支援センター、障害者の相談基幹センター、老人クラブ、保護司会、遺族会、福祉人材センター等、福祉に関わる相談機能や事務室が集約されています。お気軽に御相談ください。

3階には、150名を収容できるこちらの多目的ホールをはじめ、研修室、会議室があります。ボランティアや市民活動の場として利用できますので、大いに活用していただければと思っております。

このようにボランティア・市民活動の拠点となる施設がオープンしました。私ども社会福祉協議会はこれまで以上に、ボランティア活動の活性化を推進してまいります。

そして、多様化するボランティア・市民活動において、

- ふだんの ぐらしの しあわせ である福祉の精神
- 一人ひとりの持っている思いやりの心、助け合いの心をひとつの「ともしび」として持ち寄り、それを大きく育て、障害のある方もない方も、高齢者も若者も共に生きる仲間としてお互いに支え合う「ともしび運動」の精神
- すべての人たちがともに幸せになる、希望の光をともしというトモシアの精神

を共有し、開かれたこの社会福祉センターで、ここにお集まりの皆さんとともに前に進んでまいりたいと思っております。

最後になりますが、長岡大学では、このトモシアのオープンに合わせ、市内のボランティア活動の一層の促進を図るため、大学内にボランティア調査研究会を設置されました。今年度の事業の柱は、市内のボランティア団体とNPO、そして県内のボランティアセンターの活動状況の調査と分析であり、もう一つはこの度のシンポジウムであるとお聞きしております。

長岡大学の日頃からの地域連携活動に敬意を表しますとともに、今後も地域福祉活動の推進に御協力をお願い申し上げ、開会の挨拶に代えさせていただきます。

第2部 パネルディスカッション

2017 長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

テーマ：「ボランティア活動で人の輪（和）をつくろう！」

<パネリスト>



長岡市社会福祉協議会
ボランティアセンター班長
う さ み のぶひさ
宇佐美 信久 氏



NPO 法人
市民協働ネットワーク長岡
たかはし ひでかず
高橋 秀一 氏



長岡傾聴ボランティアサークル
会長
たどころ のりこ
田所 典子 氏



フードバンクにいがた
長岡センター
やまざき かずお
山崎 一雄 氏

<コーディネーター>



長岡大学
准教授
よねやま むねひさ
米山 宗久



長岡大学地域連携研究センター
運営委員長
はらだ せいじ
原田 誠司



<ボランティアで人の輪(和)をつくろう!>

●3点にわたり議論をします!

原田誠司 (長岡大学地域連携研究センター運営委員長)

それではこれから第2部、後半のパネルディスカッションをはじめたいと思います。テーマは、「ボランティアで人の輪(和)をつくろう!」です。

まず、進め方を申し上げます。最初に、パネリストの方の自己紹介をお願いします。その後、先ほどの報告で大きく3つくらいの論点がありましたので、3つくらいのテーマで議論したいと思います。第1に、ボランティア活動の現状をどう見るかという点です。基調報告で最後に整理しましたが、もう少し具体性に議論したいと思います。

第2に、今後、ボランティア活動を活性化していくためにはどうしたら良いか、その辺について議論したい。第3は、今日このボランティアセンターが新設されましたが、ボランティアセンターで何をやるか、センターの機能について議論できたら、と思います。

自己紹介については1人1分くらいでお願いします。それ以降のご発言については、だいたい3分くらいでお願いしたい。全体としては、90分くらいで、時間は限られていますので、ご協力いただければと思います。

それでは最初に自己紹介を簡単をお願いします。まず宇佐美さんからお願いします。

●ボランティアセンターへのご提言を!

宇佐美信久 (長岡市社会福祉協議会ボランティアセンター)

皆さん今日は。私は長岡市社会福祉協議会ボランティアセンターボランティア活動推進班の宇佐美信久と申します。

私は社会福祉協議会に入りましてまもなく20年が経過しようとしています。当初の10年間は介護の事業に関する部門におり、その後山古志支所の勤務3年間を経て、現在のボランティアセンターに勤務しています。本来であれば、ボ

ランティアセンター長や地域福祉課長が登壇させていただくべきところですが、他用がございまして、私のような若輩者がお話をさせていただきましたことになりました。今日はよろしく申し上げます。

こういったパネリストとしての役割は今日初めてです。今日はボランティアセンターへのご提言を賜りたいと思いますので、よろしく申し上げます。

原田 どうもありがとうございます。それでは次に市民協働の高橋さんよろしく申し上げます。

●市民協働センターで<つながり>をつくろう!

高橋秀一 (NPO法人市民協働ネットワーク長岡)

皆様今日は。NPO法人市民協働ネットワーク長岡の高橋と申します。当NPO法人は、アオーレ長岡の東棟3階にあります「ながおか市民協働センター」を運営しています。皆様には、「らこって」という冊子がお手元にあると思いますがそちらを使って紹介させていただきたいと思います。市民活動情報誌らこっては、「そうらこって」と方言を使うことで皆さんに親しみを持ってもらい、様々な市民活動を認知してもらえたらと思い毎月発行しております。

それでは、ながおか市民協働センターについてご紹介します。見開きに、「協働のまち長岡」として、長岡市が協働のまちを推進していることがわかります。われわれも、NPO法人として、行政、市民活動の方々、企業の方々など、様々な組織の皆様とつながり、より良い暮らし方やまちづくりをテーマに、協働しております。また、1頁めくっていただくと、市民協働センターの支援メニューがあります。まずは、「つながる!」ですが、個人の方やボランティアをやりたい人、団体同士をつなげています。次に「ひろがる!」です。ホームページやフェイスブックなどによる情報発信もしています。そして、「あつまる!」ということで、こちらは資金調達です。活動するにはお金が必要

ですので、申請書づくりの支援もしています。「まなべる！」では、講座等を開催しております。さらに、「つかえる！」ということで、こちらのトモシアもそうですが、協働センターも活動の拠点として使っていただけるように、印刷機があったり、会議室なども無料で借りることが出来ます。

ですから、皆さんが、何かしら、やりたいというところがあれば、是非、ご相談していただければ、と思います。以上です。

原田 どうもありがとうございました。それでは次にお隣の山崎さん、お願いします。

●フードバンクにいがたをご紹介します！

山崎一雄 (フードバンクにいがた長岡センター)

フードバンクにいがた長岡センターの山崎です。よろしく申し上げます。皆さんのところにお配りしてあります紙が2枚ほどあります。黄色い紙、それから「フードバンクにいがたについて」というA4版の資料があります。これに基づきまして、この後の具体的な活動の内容を詳しく説明させていただきます。

その前に、「フードバンクにいがた」、または「フードバンク」という名称を聞いたことがある方、挙手していただけますか。ありがとうございます。とても多くの方が挙手いただきました。ありがとうございます。私も多くの方はこの中で顔見知りの方が多くてありがたく思っております。ただ、まだ「フードバンクにいがた」は日本に入りまして十数年しか経っていません。新潟ではまだ4年なのです。もうちょっと遡りますと、スタートはアメリカでして、1967年にアメリカでスタートしています。いま日本には40数団体、アメリカには203団体、ヨーロッパにもあります。その中でこういう機会をいただいて、皆さんにフードバンクの活動をご理解いただきたいということで今日、寄せてもらっています。よろしく申し上げます。

原田 どうもありがとうございました。それでは次に、傾聴ボランティアサークルの田所さんお願いします。

●傾聴活動で高齢者等支援を！

田所典子 (長岡傾聴ボランティアサークル会長)

傾聴ボランティアサークルの田所と申します。よろしく申し上げます。なぜ、私が傾聴をはじめたかということをも、お話ししたいと思います。実は、中越地震のとき私は日赤病院で手術を受けておまして、個室に入っていました。全て電源が落ちて、エレベーターも使えない、看護師も緊急でいなくなってしまう、ほとんど外部との接触がなくなって、主人は自宅がめちゃくちゃだったものでなかなか来られなくて、1週間から10日くらい、ほとんど誰も話せないような日が続きました。

そのときに、顎が硬くなって、ものが言いにくくなるということをはじめて経験しまして、ああ人間ってしゃべれなければ駄目なのだと思います。退院して、松葉杖をつきながら、近くの施設でおしゃべりをさせてくださいと、伺ったのがきっかけでした。おしゃべりをしているうちに、これは、勉強しなければ駄目だ、と思って傾聴の勉強をはじめた。勉強をはじめたら仲間がいなければ駄目だと思って、サークルを立ち上げて、この11月に7年目に入りました。

傾聴という言葉はだいぶ一般的になっていると思うのですが、もともとは<ピアサポート>という、ヨーロッパ、アメリカの考え方で、同じ連帯の人達が何か問題を持っている人を支えようということからはじまったものです。それが1999年にその考え方を学びに行った人が日本に持ち帰って、何がいま日本で大事かという、いま一番高齢者に対するサポートが必要なのではないかと、高齡施設に対する傾聴を中心にボランティアの養成をはじめ、ここに来て、全国的に広まっているということです。

長岡では、私たちのサークルでは28名の会員がいます。デイサービス4カ所、グループホーム1カ所、それから老健施設2カ所、知的障害者の作業所、知的障害者の老健施設、個人のお宅8名というところで、皆で手分けをして自分の行けるところの曜日をつかって活動するというで活動しています。

とにかく信頼関係ができなければなかなかお話しはできないものです。それを得るために、半年くらいかかる。ですから、自分ができる範囲

で長く活動してもらおうということを基礎に皆さんと一緒に活動をしてきています。よろしくお願ひします。

原田 どうもありがとうございました。もう第1クールまで入ってしまうような話でしたが。

それでは自己紹介が終わりましたので、最初のテーマで、ボランティア活動の現状について議論したいと思います。先ほどの基調報告と、現在やられているボランティア活動あるいは支援の現状を絡めてご発言いただきたい。あるいは現在活動されている観点からいうと、このアンケート結果のこの辺はなかなか良いがこの辺は疑問だということがあれば、ご指摘いただければと思います。自己紹介で米山は残っているのですが、先ほど基調報告をしましたので、省略します。

それでは、フードバンクの山崎さんから、現在のボランティア活動の現状とご意見についてお願ひします。

●生活困窮者自立支援法や障がい者支援施設等に広く食品を提供

山崎 先ほどの資料にもとづいてお話をさせていただきます。米どころ新潟でも、ご飯を食べられない人がいます、というショッキングな内容です。まだ食べられるのに捨てられている食品がいっぱいありますよ、とここに書いています。それでグリーンの囲みで、「もったいない」から「ありがとう！」へということです。簡単に言いますと、「もったいない」食料品を、「ありがとう」へつなげたい。当然、生活困窮だったり障がい者施設だったり、または引きこもりだったり、またいまちょっと話題になっている子ども食堂などの支援を行なっています。

この余っている食品、「もったいない」食品から、「ありがとう」へつなげる、この「から」という部分が、フードバンクにいがたの活動です。具体的には、この右側の真ん中辺に「飽食」と書いてありますが、事業系廃棄物715万トン、食品ロス500～800万トン、合わせて500～800万トンが、食べられるのに、捨てられています。いま、日本のコメの生産量はだいたい800万トンくらいです。それくらいの食品が捨てられている。こんなもったいないことはない。

海外をみますと、アメリカ等では、教会でそ

ういう人たちへの施しというか分かち合いが行われています。

厚生労働省の資料（国民生活基礎調査）によれば、相対的貧困率と子どもの貧困率のグラフに示してありますが、昨年の4月から、「生活困窮者自立支援法」が施行されました。各市町村でその施策が動いています。食べもの、生活、働くところ、住むところがなくて困っている、方々の支援を行う、という法律です。各市町村、例えば、南魚沼市ですと社会福祉協議会、小千谷市ですと小千谷市役所がその任を担っています。長岡はパーソナルサポートセンターが担っています。

フードバンクでは、困っている人と余っている食品をマッチングする活動をしています。また、地域的に集めたものは、できるだけその地域の方にお渡すように行っております。

ただ、最近、個人の方から、私は食べるのに困っているから提供していただけないか、という問い合わせがきますが、今は、契約している施設以外には提供しておりません。長岡では12施設、新潟ですと、全部で62施設くらいあります。施設との契約で提供しています。契約している施設経由で個人にも長岡ですと、5人ほどいっています。これは母子家庭の方で働いてらっしゃるのですが、子どもが5人いられて、なかなか食費が大変だからということで、生活保護を受けていませんが、フードバンクから提供しております。知的障害の方がやはり理解不足で、障害者年金をもらうとすべてお菓子を買ってしまっただけで食べるお米がないというような、そういうところにもお出ししたりしています。生活困窮者自立支援法に基づく制度の上でお渡ししているものと、障がい者支援施設、それから長岡ですと児童養護施設、そういうところにも届けています。また、一部引きこもり支援団体、一部薬物依存の支援団体などにも定期的届けています。

●お米の寄付は多い。寄付の充実を!

山崎 新潟はお米の寄付がとても多くて、お米の寄付を現在大変多くいただいているものから、月に20キロから30キロ核施設にお届けしている。また年末12月等では北九州と東京へ炊き出し用のお米をNPO法人へ寄付させていた

だいているという活動もいま現在しています。

なかなか知られていないのですが、昨年のデータをお示します。2015年4月から2016年3月までの1年間、新潟全体で集めた食料品は17トンあります。当然お米が大変多いです。それから、寄付をしたものは13トンあります。それだけ多くをお預かりし、お届けさせていただいているというところですよ。

いま現在、フードドライブといいまして、長岡市社会福祉協議会さんでは、偶数月に来場者が気軽に寄付できるような形をとっております。各支所にもお願いして集めさせていただいたり、またはながおか医療生協さんの施設とかそういうところでもやっております。また連合中越さんの関係ではメーカーのときにそんな活動をしたり、またはいろいろな行政や、この前は原信さんから協力いただいたりもしています。原信さんの組合とかそういうところからも寄付を多くいただいております。ボランティア活動については、人が少ない、または資金が足りない、ことが現在の大きな課題として抱えております。長くなりましたが、ありがとうございます。

原田 もう少し短くお願いします。1つ質問です。例えば、お米を集めてそれで施設に届けるのは、具体的にどのようなようにしているのでしょうか。一言で説明してください。

山崎 寄付いただく方は、私の携帯電話に連絡をいただくか、または社会福祉協議会や市民協働センター等に連絡がいて、私につながって、私に取りに行くなり寄付をもってきていただきます。それを倉庫に保管しておき、月末に寄付するという形です。

原田 ここに書いてある「企業1団体」というのは、1社しかないということですか。

山崎 これは会員です。企業会員は年会費1万円、個人会員は年会費2000円。それ以外に多くの方から寄付をいただいております。

原田 ボランティア登録者16名とは…

山崎 ボランティアの16名は、会員にはならないけれどもボランティアはできますよ。お金は払わないけれどもボランティア活動には協力いたします、という方です。

原田 それも登録するわけですね。

山崎 ええ、一応個人情報をおたかないと連絡できないものですから。

原田 16人では少ないですね。

山崎 これは長岡だけで16人。ほとんど同じだから毎回やっていただいております。

原田 次に田所さんから、傾聴について活動の状況をお話しいただけたらと思います。

◎傾聴の基本は、丸ごと受け入れと寄り添うこと!

田所 傾聴ボランティアは、お話を聴くことに特化したボランティアです。資料を見ていただきたいのですが、よくカウンセリングと混同されることがあります。

お話を聴くのは一緒ですが、カウンセリングはその後に問題点を見つけて、その問題を解決する方策を示します。ところが傾聴は一切そういうことはしません。話を聴く、その人は、例えば普通自分がどんどん話をしていくと、話しているうちに本人が問題に気付く。その気づく手助けをするだけでその後結論を出したりするのはご本人。だから私たちはとにかく話を聴くことをします。そこがカウンセリングと大きな違いです。

手書きで読みにくい資料を出してしまって申し訳ないのですが、4頁目を見ていただきたいのですが、新聞投稿よりというところですよ。これは私たちがやらなければならないことの基本を書いた詩です。東京の地方紙に載ったものです。作者の方は連絡をとらしていただいたら、難病をかかえてらして両足の指を切断してしまって、いま歩行困難になっているというようなことをお聞きしました。その方が新聞に投稿した詩です。

ここに書いてある、「病人は、話を聴いてほしいのです／苦痛や怒りや不安や羨望…／湧き起こるもろもろの感情に／いつでも耳を傾けてほしいのです／心の平安と成長のために／じたばたと揺れる姿を／ずっと見守ってほしいのです」、これが私たちの傾聴の基本です。その人の状態を丸ごと受け入れるということ、その人に寄り添う。この2つのことだけなのです、大きなことは。それをもとに私たちは、いま高齢者の方、認知症の方、知的障害の方のところに行ってお話を聴いています。

◎多様な反応に正しく対応できるように勉強!

田所 1つ注意しなければいけないのは、例えば認知症の方の場合、いろいろな症状がありますね。アルツハイマー症とかレピー小体型とか。そういう症状によって注意しなければならないところが違うのです。そこを勉強してからやらないと、間違った形で聞くと、かえって怒らせたり、感情を高ぶらせたり、悪い結果になるということがある。私たちは常に勉強しながらお話を聴く活動をしています。

話を聴きに行っても、相手は人間ですので、様々な反応があります。その反応で私たちは戸惑ったり、こんなことを言われてしまった、怒られてしまった、というのを、またサークルに持ち帰って、皆の前で話す。こういう反応があったのだよというのと、それはこういうところが違ったのではないかとか、もっとこうしたら良いのではないかとか、この次はこうしてみようよということを話し合いながら活動をしています。

とりあえず話してもらおうというところまでいくまでに、3か月から半年くらいかかります。だいたい月1回、多い方は月2回、3回というふうにお会いしているのですが、月1回ですと、3か月でようやく顔をおぼろげながらわかってもらえる。あなたこの間どこかで見たね、とか。そうそう、そういえば前にも来ていたねというのが3か月くらいで、半年くらいになると、なんとなく、ああ今日は良い天気だから良かったね、ということ言ってもらえる。1年くらいかかるとようやく会話が少しずつ進んできて、昔はこうだったよね、という話が出てくる。そのくらい時間がかかるものなのです。だから私たちは、無理せず長続きする活動をしたいというふうに考えています。新しく入ってもらった方には、一度施設に行ってもらわないとわからないところがいっぱいあるので、とりあえず一緒に行きましょうと施設に行き、もうもう、ええっとか言いながら帰ってこられる方もいらっしゃいますが、その中から皆で見つけ出してこれからやっといこうよというふうにしています。

社協さんがやっている傾聴講座、先週でしたか、今年11月に終わったのですが、そこでチラシを蒔かせていただいて、そのなかから興味があるから傾聴をやってみたい、見学良いですかという方が何人かいらっしゃって、そういうことで毎年毎年会員になっていただく方も増えているという。

あるから傾聴をやってみたい、見学良いですかという方が何人かいらっしゃって、そういうことで毎年毎年会員になっていただく方も増えているという。

まるきり知らなくてもできることなのですが、それでもやはり少しずつ勉強していかないと難しいところがあるのは一番問題だと思っています。

原田 どうもありがとうございます。いま何人くらいの方がボランティアで活動していて、具体的に、AさんならAさんという人がどこからどういう連絡があって例えばこういうふうになっているとか、その活動の仕方も簡単に教えてください。

◎事前の準備をしっかりして傾聴に臨む

田所 活動の情報は、全部、いま私のところに集まります。施設から直接来るのがほとんどです。個人の場合はお宅にうかがったり、老健施設の場合はお部屋にうかがう。それで1対1で話を聴くという形ですが、それはケアマネさんを通して話がきます。話が来た段階で皆で話し合っって相手の都合とこちらの都合を合わせて、いきます。1つデイサービスを例にとりますと、1日1時間、だいたい午前中来てくださいますというところが多いのですが、10時から11時まで1時間。相手の方は15、6人の方がいらっしゃって、テーブルが2つくらいになって、6人ずつ2つ。そしてそこに4、5人が1施設に行くのが、だいたいいまのところそんなところですが、各テーブルに2人くらいが入って話を聴く。こちらの話、こちらの話と聞いて1時間すごして帰ってくる。

個人の場合は、ケアマネさんと第1回目は一緒に行きます。というのは、個人というのはやはりいろいろ問題が起きる可能性があるということがある。それで事前にケアマネさんとしてしっかり打ち合わせをします。個人の場合は一人暮らしで、認知症のある方が多いのです。そういう方の症状などをしっかり聞いて、それで一緒に行きましよう。

気を付けなければならないのは、ものが壊れたとか、私たちが行ったからものが壊れた、置いてあったものがなくなった、というのが一番困ることなので、それに対応できるようにケア

マネさんとしっかり話をしてからお伺いするという事です。

原田 いま傾聴ボランティアの方は何人くらいが活動しているのですか。

田所 サークルとしては28人在籍していて、だいたい22、3人が毎月活動しています。先ほど言ったようにかなりたくさんの方に施設にうかがっているのですが、一人のひとが何か所もいく場合がありますが、せいぜい2、3か所が限度ですね。

原田 わかりました、ありがとうございます。それでは、米山さんに、学生のボランティアについてお願いします。

●ボランティア論とボランティア体験で学生にボランティア活動の契機を!

米山宗久 (長岡大学准教授)

私は、ボランティア論という科目を前期(4月から7月)に担当しています。座学が多いのですが、座学だけでは面白くありませんので、ボランティア団体の方、個人のボランティアの方、ボランティアコーディネーターの方、社協の方をお招きして、実際の内容をお聞きした後にグループワークをしています。

最初はボランティアをするきっかけは何か、何があれば自分はボランティアをするのかというところから入っていくのですが、その後にボランティアを今度さらに行動まで移すにはどうしたらよいか。アンケートの件もありますが、会員を増やすためにはどうしたら良いのか、ということを生徒自身で考えさせるという形で授業をやっています。

前期は60名の生徒が参加してくれまして、グループワークはだいたい1グループ6人の10グループという形でグループワークをしています。

夏休みには、ボランティア体験の授業で、実際に体験します。大学の近くの栖吉児童館、山通りの児童館、その他には越後丘陵国営公園の里山の会の方のところに行っていただく。あるいは、フードバンクさんに行っていただく、地域循環ネットワークさんに行っていただく。さらに、三条でやっている子どもたちと一緒に100キロ歩くという旅がありますので、その裏方をやってみたり。いろいろなところに自分の希望で行く形になっています。その発表会はず

でに終わります。悠久祭のときに各個人、グループごとに発表して、自分自身で発見したこと、反省すべきことは何かということをやっています。多くの生徒が反省点等を検証して、次のボランティア活動に続けるという形になっています。

ボランティア体験が終わった後も児童館に行き、実際に活動を続けている生徒もいます。子どもたちからまた来てねと言われて、また行きたい、というきっかけづくりにもなっているかと思えます。以上です。

原田 ありがとうございます。次に、ボランティア活動の支援の現状について宇佐美さんから、お願いします。

●長岡のボランティア活動は活発

宇佐美 資料は用意してきたのですが、時間がなさそうなので、かなりカットして話をさせていただきますと思います。

私どもの上部組織に、全国社会福祉協議会全国ボランティア市民活動振興センターがあります。そのセンターでは、昨今のボランティア、市民活動を取りまく環境は大きく4つの要素があると言っています。1つは、地域の生活課題や個人、家族の福祉ニーズが多様化、複雑化、深刻化してきたこと。2つ目には、災害が多発して被災者支援に対する市民の意識と参加が高まっていること。3つ目は、ボランティア・市民活動に参加する人々が子どもから高齢者、ボランティアが企業まで拡大してきていること。4つ目が、介護保険制度や生活困窮者自立支援制度といった国の制度の見直しに伴ってボランティア、市民活動に注目が集まっていること。以上の4つが大きな要素として挙げられています。

時間の都合もあって、この4つの要素に関する話は割愛させていただきますと思うのですが、長岡市内でも同様にこれらの要素を含んだ課題、またその課題に対する取り組みであるボランティア、市民活動は行われています。

市内の取組みをされている活動者数ですが、ボランティア活動が多岐にわたり、調査の基準もあいまいなので、確定的な数字は把握できていません。ボランティア活動保険への加入者数を見ると、昨年度長岡市内の加入者数は一部重複

を含めて8,442人です。個人の加入者です。人口当たりでは、22人に1人の方が加入されていることになります。県都の新潟市では36人に1人、上越市では44人に1人で、県内20市でもトップの加入者数割合です。長岡市は意欲的に活動されている方が多いと言えます。

●<くささえる、つながる、きずく>で支援

宇佐美 ボランティア活動に対して、私ども社協のボランティアセンターは、これまで、<くささえる、つながる、きずく>というコンセプトで、支援してきました。

まず、<くささえる>では、ボランティア団体の育成・支援を、各種講座、社協だより、ホームページ等の広報を通じたボランティアグループへの入会勧奨、活動資金の助成情報の提供などで行ってきました。

次に、<つながる>は、これが本来私どもの業務になるのかと思うのですが、ボランティア活動に参加したい方と、ボランティアを募集する方の橋渡しをやってきました。ボランティア連絡協議会を通じて加盟団体同士の交流・情報交換の場を設けております。

最後の<きずく>ですが、活動者のすそ野を広げるために、ボランティア大学を開講しております。ボランティア大学は基礎講座、介護講座、傾聴講座、初心者講座の4つの講座を開催しております。基礎講座は全14回シリーズで、福祉系のボランティアに関する様々な基礎的な知識、講義、体験を通して学ぶ。介護講座では、その名の通り初歩的な介護技術の習得、高齢者福祉制度に関する制度を学ぶ。傾聴講座は、春と秋に3回シリーズで、傾聴とコミュニケーションに関する技術を学ぶということで講座を開催しています。4つ目の初心者講座は、手話、点音訳、要約筆記等の技術系ボランティアの初歩的な技術を学ぶ講座を開講しています。

<きずく>という面で欠かせないのが、児童、青少年期からの思いやりの心を育てる、触れる機会を持つことです。市内の小中高等学校、特別支援学校の全校を社会福祉協力校として指定して、赤い羽根共同募金を財源として各学校の福祉活動にかかわる費用を助成しています。この助成金をもとに、各学校で各学校の地域に応じた活動が展開されています。あわせて社協の

職員等が学校に出向いて指導していたりするという形になっています。

そのほかに、ボランティアセンターの事業としては、ボランティア連絡協議会の活動資金となる古切手の収集や整理、各種ボランティア保険の受付、ハートカーの運行なども行っています。

いままでは、このように社会福祉協議会の一組織として社協内の課や各支所地域にある支所と連携をとりながら、また市内のボランティア団体と協力を得ながら、これまで主に福祉に関するボランティアの育成の部分に力点を置いてきました。他方で、本来業務であるコーディネート業務ですとか、他の団体との連携についてはあまり実績があがってこなかったというのが実情だと思っています。

原田 どうもありがとうございます。ちょっと質問です。ボランティア保険の概要を教えてください。

●トモシアの施設も充実

宇佐美 ボランティア保険は、いろいろな種類の保険があります。単発のボランティア活動保険は、ボランティア活動の際の、相手に対する賠償保険とか、自分のケガに対する保険になっています。年度ごとの保険です。

原田 保険料はどれくらいですか。

宇佐美 概ね300円で、災害ボランティアの場合は510円です。

原田 わかりました。本学の学生も入っていますので。もう1つ、<つながる>の、いままでのマッチング件数はどのくらいか。講座の総受講者数もどのくらいか。教えてください。

宇佐美 これは聞いて喜ぶ話ですが、このトモシアに来てから相談者が増えています。旧センターでは3日に1人くらいですが、ここでは毎日、相談者がおります。新施設を見に来ている方もいると思いますが、活動に関心をもつていただくことができるので、それでもよいと思っています。毎日、2~3件の相談があります。

ボランティア大学の受講者は基礎講座が年間30~50人くらい、介護講座20人、傾聴講座が人気で、あわせて60人、初心者講座があわせて30、40人くらいです。

原田 それは卒業証書とか出るのでしょうか。

宇佐美 一応修了証書がでます。

原田 修了証書を受けた人が保険に加入して、ボランティア活動に向かうという感じですか。

宇佐美 実際には、ボランティア大学を出た後すぐに活動をはじめられる方はそうそういない。半数程度ではないかと思います。ただあちこちに、修了者の方を見かけることができますね。そういった方を見ると嬉しくなります。

原田 すると、ボランティア保険に加入した人は半分くらいが講座出身ですか。

宇佐美 そんな多くはないですね。3割もいないのではないのでしょうか。

原田 でも、非常に良いですね。わかりました。目標についてはあとで聞きます。どうもありがとうございました。それでは市民協働の高橋さんをお願いします。

●ボランティア活動がしやすい環境づくりが重要

高橋 市民協働の活動のなかに、ボランティア活動の活発化支援があります。地域でのボランティア活動や市民活動団体を立ち上げたい方に対して支援をしています。ボランティアは大きく、地域型とテーマ型（例えば、子育てとか福祉など）の活動があると思います。

市民協働センターに来られる方は、どちらかというテーマをもっている団体の方が非常に多くいらっしゃいます。NPO法人は、市内に約70団体あります。その他に任意の市民団体は正確な数は正直把握できませんが600団体は存在しております。災害系の活動は、一定期間後に終了するケースも多いです。

市民協働センターでは、ボランティア活動支援を明示しているわけではありませんが、アオーレ長岡東棟の長岡市役所総合窓口でボランティア相談があった場合は、われわれのセンターにこられる方も多いです。その際は、福祉等様々な活動団体等について紹介し、情報提供を行っています。相談に来られる方は、月に1~2人くらいです。

先ほどから、ボランティアの人材が不足している点が指摘されています。私は、その要因の一つとしてボランティア活動に価値を見いだせていないのではないかと思います。ご自身の家族や身の回りに何らかの課題を持っており、その解決に取り組むというような状況が大きく左右するのではないかと考えます。現状ではボ

ランティア活動をやりたい方がいる一方で、やれる場・環境づくり、そういう情報提供が重要ではないか、と思っています。

原田 どうもありがとうございました。市民協働ネットワークの諸活動のなかで、ボランティア活動・相談・支援は、どのくらいの比重ですか。例えば、7対3とか。位置づけ。

高橋 相談は月に1件、月に70件くらいになります。他の団体との連携、資金の問題、組織の強化など多様ですが、やはり人材不足している点が一番多いのではないのでしょうか。その人材も、だれでも良いというわけではありませんので、なかなか難しい問題ですね。

原田 どうもありがとうございました。あとでまたその点お聞きしたいと思います。第1クールが終わったのですが、時間がなくなってきました。パネリストの方の発言で、だいたいどういう活動をされているかということは理解できました。

第2クールと第3クールを合わせて、ボランティア活動の課題・活性化の方向、ボランティアセンターの方向を一緒にして、議論したいと思います。なぜボランティア団体が増えていないのか、人材不足をどうするか、ボランティア活動の契機、自発的な行動・活動への方策など、どうするか。そのための情報の提供をどうするか、いい方法はないか。その点も重要だと思います。これらの諸点について、お願いしたい。田所さん、どうですか。

●傾聴グループを各地に増やす!

田所 新しいボランティアのサークルができてこないということですよ。

原田 田所さんのボランティアの傾聴グループはどんどん増えているというのであれば良いのですが。

田所 私たちのグループは、社協の傾聴講座に声をかけて立ち上げたサークルです。その前に何年も傾聴講座をやられています。現実には、第1期卒業の方がいま90歳になられて、それでもその方は私たちのサークルにまた入ってきてくださって、いまだに傾聴活動を行っています。地域でそれぞれに活動しているグループはあると思います。

でも、個人情報関係で連絡をとりたくても

電話番号はわからないし、連絡できません。小国地域とか、結構、遠いところのケアマネさんから、うちに来てくれませんかという要請があります。いくつかは行っているのですが、とても行ききれない状況です。近くにそういうサークルがあって紹介できればよいのですが。受け皿が広がり、皆さんの傾聴の場が広がっていくと思うのですが。そういうことがいまは、一切無い状況です。そういうことをできる場が社協のボランティアセンターかなと思っているのですが。

原田 情報ですね。すぐに得られる。それは1つあると思います。

●有償化の問題の検討も必要!

田所 それからもう1つ。ここで言うことかどうかわからないのですが、ボランティアの有償か無償かの問題です。私たちは、ここに皆が集まってやるのも、無償で来ていますし、その他に各施設に行くのもガソリン代から何から全部自分たちで、無償でやっています。そういうところの話が出た時に、え、そこまでということが現実にはあります。でもそれを乗り越えて皆集まってきてくださっている。そういう意味では、やはり意識が高い方が行っている。そこまでできないと言われる方も実はいらっしやいます。なぜ有償にしないのかと。そういうところも1つ問題としてはあるのかなと思います。

ついでにもう1つ言わせてください。実は赤い羽根募金で、私たちも年会費2000円ずついただいているのですが、ほとんど郵便の送料でなくなってしまう。勉強会をやるのにはいろいろなところから補助金をいただかないとできない状況です。必死で補助金をいただいて、それこそ協働センターに、補助金の窓口はどこかにありませんかと聞いています。赤い羽根の場合、部内の勉強会には使えないのです。だからもっと、自分たちが学習するものに使えるような補助金はないか。そういう補助金があれば、どこでもいただきに行きたい感じです。余計な事ですが。

原田 それでは山崎さん、お願いします。

●体制の構築へーフードバンク長岡の場合ー

山崎 先ほどもお話ししましたように、フードバンク自体はまだ活動自体が若い団体ですし、知名度が低い。商品を集める活動、先ほどいった「もったいない」部分、それから寄付を募る活動、その中にあるコーディネートをするフードバンクの人間、この3つが一緒になって活動する必要があります。寄付はもらってもお届けする場所がない、または寄付とお届け先があるのだけれどもそこで活動する人がいないというような状況をどう解消するか、まだフードバンクの場合は大きな課題です。その辺の調整を私がいま図っているところです。

まだまだ人とのつながりをどう強化するか。市民協働ネットワークの高橋さん、社会福祉協議会の宇佐美さんとお話しして、人を手配していただく。そんな活動の段階です。だから、まだできてから浅い団体ですので、活動自体はボランティアも含めてまだまだ初歩的な段階だということなのです。

今回とてもうれしかったのは、夏休みに長岡大学の学生さんが3人フードバンクに8月、9月に延べで30時間から40時間くらい来ていただいたことです。1人の学生さんが、私は人の前で話したり、人と接するのがとても苦手だったのですが、ボランティアをやることによって、少し慣れたような気がしますと言っていました。この言葉を聞いたときに、ああボランティアをやらせてよかった、と実感しました。実際に、そういう効果があるとわかってよかった。ボランティア活動でそういう個性を伸ばしていただければうれしい。

原田 ありがとうございます。米山先生どうですか。

●座学だけでなくボランティア活動を!

米山 私とすれば、学生にいかにか自発的な意思で行ってもらえるかという点が重要です。案内引込み思案の学生たちが多い。男女別で見ると男性が多いのですが、男性の方が引込み思案の学生が多い。男の学生をいかにか自発的にボランティア活動に進むか。私が来年やろうと思っているのは、強引でも良いので、ボランティア論のなかで1度は課題で、ボランティアに一

度行ってこい、それが1日の課題。そこから何か発見するものがあれば、楽しかった、それだけでも良い。そうすればまた次につながる可能性もある。来年はそうやってみようかなと思っています。ただ座学をやるばかりではなくて、ボランティア体験の1つ手前のキーポイントとしてやってみようかと思っています。

原田 今年の大学祭=悠久祭で、ボランティア・フォーラムを開催しましたね。先ほどの話やアンケートでもそうですが、学生がボランティア活動に参加すると非常に良いという、学生にとっても良いし、すでにボランティア活動をやられている団体にとっても非常に良いということですね。では、学生を参加する方向にもっていくといった場合、米山さんが今年やられた中で、ボランティア活動なり団体に関する情報は十分に大学から提供されていますか。

●学生が自発的にボランティア活動へ

米山 基本的にはボランティア体験は夏休みなのですが、一応自分で探してきなさいという話はしたのですが、実際はそこまで行動に移せないということで、今回は私がメニューを、子ども関係でいえばここでどうでしょうかというようなメニューをつくってしまいました。そこに集中してしまったという形もあります。

ただ、実際にふたを開けてみたら、山通児童館、栖吉児童館で大変喜ばれて、ぜひ来年も来てほしいというような、逆に良かったところもあったのですが、自発的にボランティア先を自分で探すということは来年度やってみないなということです。

そのためには、ボランティアセンターに足を運んでという形でもっていきたい。それから市民協働センターにも。

原田 情報提供等ボランティア活動を充実させる方策について、お伺いします。まず、高橋さんから。相談は多いこと言いましたね。そうすると現在のボランティアの相談とボランティアセンター、社協の関係は具体的には連携してやっていると考えてよいのでしょうか。

●相談者のニーズに対応した情報提供 - マッチングの観点から -

高橋 そのあたりはまだじゅうぶんではない。宇佐美さんとは情報共有していますが…

原田 それは個人のレベルですか。

高橋 1対1というわけではなく、両組織の職員のレベルで、進めているということです。でも情報共有の<場>があるかといえば、現状ではなかなか出来ていません。情報発信という観点でいうと、私たち協働センターでは、ホームページ等に出すのは控えておいた方がよい、という考えであります。ホームページに出すと、だれでもすぐにアクセスできるという点で、プラス、マイナス双方がありますので。フェイス・トゥ・フェイスで、来られた方のスキル等を聞いた上で、情報を提供するケースも多い。相談者のニーズにきちんと応えるという点が重要だと感じております。ある意味でのマッチングですね。

原田 トモシアのボランティアセンターとの関係はどうですか。

高橋 福祉関係の専門的情報はお持ちなので、われわれは他のジャンルの情報提供や、アオーレ長岡にいるので行政情報はより豊富かもしれませんので、そういう情報を提供・相談する。お互いのノウハウの部分の情報を共有することが必要なと思います。ただ、同じことをやってもしょうがないと思うので、きっちりと棲み分けしたうえで、協働することが必要でしょう。

原田 わかりました。それでは宇佐美さん、ボランティアセンターとして、どうされますか。

●<いいね!> = <共感>がボランティアの輪をつくる!

宇佐美 先ほど米山先生が言われた点で、「自発的な意思をどうやって助長していくか」ということですが、これが重要だと思います。先々週、全国ボランティア・フォーラムが開催され、今日と同じようなテーマで行われました。

そこで登壇された、大手の広告代理店企業の方が、いまの若者を動かすには、フェイスブックとかLINEで「いいね!」という答え方がありますが、それと同じような感じで「それだ!」というところがキーワードになる、と発言して

いました。これは、要するに、＜共感＞の表現ですね。同じ目的に対して自分も同感するから自分も参加したいといった部分、輪をつくっていくにはこういったところが大事になるのではないかと思います。

もう1つは、先ほど原田先生がおっしゃられた＜きっかけ＞です。何でも良いと思うのです。まったく違うアプローチ、ジャンルで、こっちが声をかけて。ここでいえば、トモシアに来てもらって、こういった活動もあるからというのを知ってもらって、共感を得る。それで活動の輪が広がっていくのかなと考えています。

そういったところで、皆さんからミッションを与えられましたが、やることは山積みなのですが、まずはトモシアにきていただいて、そこで何かしらの活動の広がりを見せていければ、と考えおります。

●学生の自発的意思を引き出すボランティア情報の発信を!

原田 ありがとうございます。ボランティアセンターにはぜひ頑張ってくださいと思います。新しい人、若い人が参加するという意味では、それこそ長岡には3大学1高専がある。前々から、新市長も言われていますが、私からみるとそれを活用した大した施策はない。ですから、例えば、長岡大学は小さい大学ですが、長岡技大などはすごく学生は多いわけです。造形大も高専もあるし、高校生だっている。若者の数は多い。しかし、なにをすれば、地方創生に資するのかわからない。

1つ、この大勢の学生にどんなボランティアの情報発信し、学生の参加を募るか。学生の自発的意思を引き出すような情報発信をボランティアセンターにやっていただく。ぜひ、ご検討いただきたい、そう感じしております。長岡大学は、ボランティア大学を目指して今後も進んでいきたいと考えておりますので、連携・協働を充実させていきたいと考えております。

本日は、長時間ありがとうございました。これでシンポジウムは終了とします。(拍手)